２０２５年度

湘南白百合学園中学校

入　学　試　験　問　題

国　　語

１教科入試　６０分

受験番号		氏名	

〇受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

一

後の問いに答えなさい。

＊答えは解答用紙に書きなさい。

問一　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

① 皇太后さまにお目にかかる。　② 小さな店を営む。　③ 乳児の世話をする。

④ 輪唱の練習をする。　⑤ 都落ちする場面を読んだ。

⑥ クレープのソウを重ねる。　⑦ イサイは書面で連絡する。　⑧ 新たなキャプテンとしてシュウニンした。

⑨ エンゲキを見に行く。　⑩ 心をこめてシャレイの手紙を書く。

問二　次の――線部が意味の内容になるように、□にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。なお、□には後の太枠内の――線部を漢字に直したときに用いられるもののいずれかがあてはまります。

① 「仕事」とは世の中に□するものだ。　意味「何かのためになり役に立つ」

② 『源氏物語』は古今に□する名作だと思う。　意味「とびぬけてこえている」

③ 地元の祭りに□じる若者たち。　意味「おもしろがる」

ローマ帝国（ていこく）のコウボウについて歴史で学んだ。
新しい政策がコクエキにかなうものかを検証する必要がある。
私の母が好きなハイユウがテレビに出ていた。
あの本はすでにゼッパンとなり、買うことができない。

問三　次の――線部が［意味］の内容になるように、□にあてはまるひらがなをそれぞれ答えなさい。

①　祖父の病状が□□ば□□くない。　［意味］「望みどおりの方向に進んでいない」

②　三月になり、寒さがしだいに□□ら□できた。　［意味］「おだやかになってきた」

③　数年前から胸を□ず□う。　［意味］「病気になる」

問四　「ことわざ一覧」を見ながらクイズ作りをしている二人の会話を読み、［1］～［5］にあてはまるものを後のア～ソからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Aさん　［1］には、芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）の作品名に使われている生き物が入っているわね。たしか、意味は［2］とほぼ同じ意味よね。

Bさん　そうね。あと、芥川龍之介の『鼻』を絶賛した作家の名前が［3］と［4］に一字ずつ使われているわ。

Aさん　本当だわ。彼（かれ）は『吾輩（わがはい）は猫（ねこ）である』を書いた人よね。［3］は「少しぐらいの助けでは効き目があまりない」というような意味だったかしら。

Bさん　うん、その意味で合っていると思う。

Aさん　それにしても、軽い気持ちでことわざを使ったクイズを作りたいという案を出したら、それが採用されて驚いたわ。

Bさん　［5］とは、まさにこのことね。クイズ大会、本当に楽しみだわ。

ことわざ一覧

ア	取らぬ狸（たぬき）の皮算用	カ	瓢箪（ひょうたん）から駒（こま）
イ	二階から目薬	キ	焼石に水
ウ	豚（ぶた）に真珠（しんじゅ）	ク	鶴（つる）の一声
エ	元の木阿弥（もくあみ）	ケ	犬猿（けんえん）の仲（なか）
オ	失敗は成功のもと	コ	河童（かっぱ）の川流れ
サ	亀（かめ）の甲（こう）より年の功（こう）	シ	猫（ねこ）に小判
ス	木を見て森を見ず	セ	弘法（こうぼう）にも筆の誤り
ソ	瓜（うり）二つ		

問五　次の新聞記事の文章、および資料1～資料3を見て、後の（1）～（4）の問いに答えなさい。

夏山シーズンは7～9月初旬で、昨年は約［1］人が登った。そのうちの6割は［2］を使った。［2］では、混雑緩和と徹夜で山頂をめざす「［3］」防止に向け、今年から通行規制を山梨県が始めた。

登山口の富士スバルライン五合目にゲートを設け、1日あたりの通行者数を4千人までに制限。午後4時～翌午前3時はゲートを閉める。通行料2千円を払う必要もあり、インターネットを通じた事前決済もできる。県によると、1～15日の通行者は2万8245人だった。

静岡側の3ルートでも、登山日程などの事前登録制が導入された。

富士山は多くの人がめざすが、天候が荒れたときは夏でも真冬並みの寒さになる。静岡側が開山した10日から11日にかけて3人の死亡が確認されるなど、遭難も起きた。高山病のリスクも潜む。

また、訪日客を受け入れる態勢は十分とは言えない。

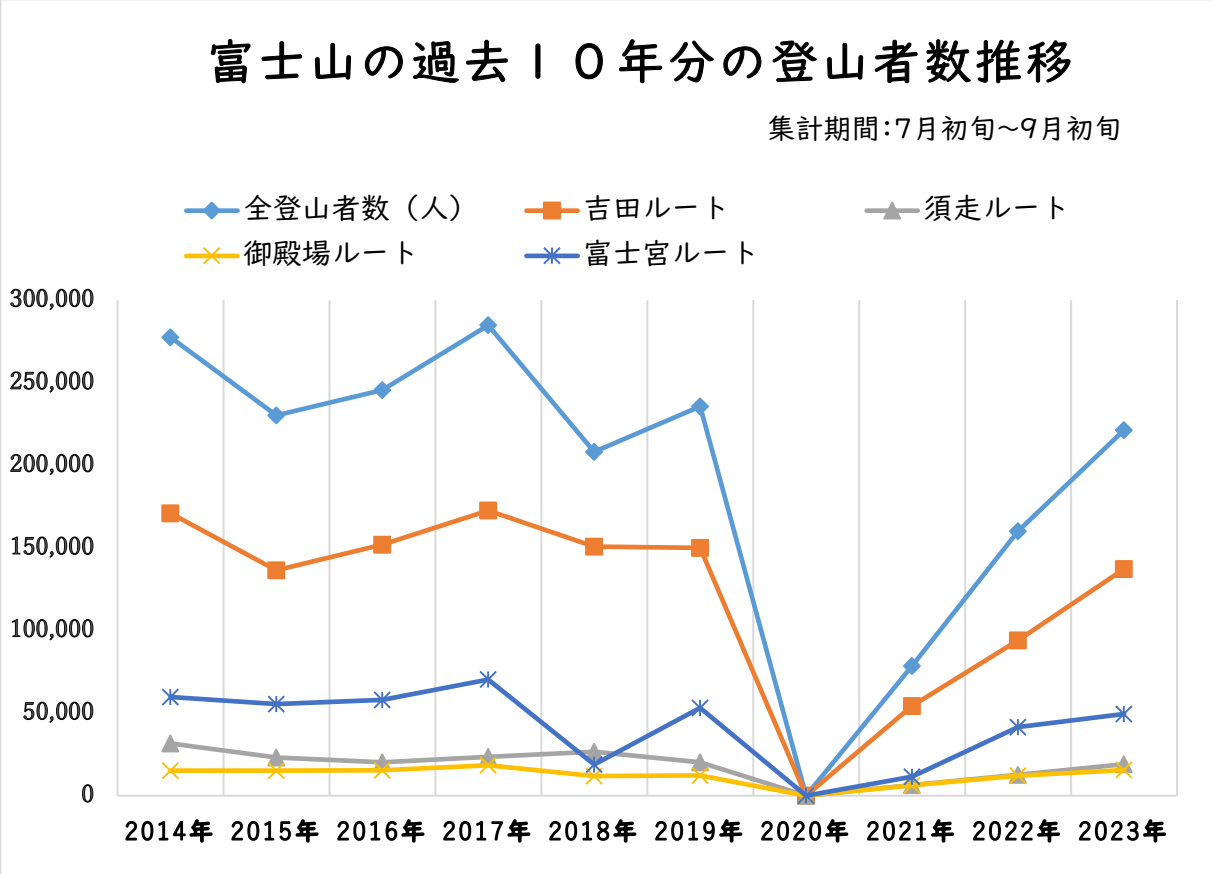
富士スバルライン五合目に向かうバスを運行する富士急バスの運転手は、多言語の翻訳が可能な携帯端末を持っている。だが、ふもとのバス停では案内の人手が足りず、乗車までに「チケットはどこで買うのか」「どの列に並べばいいのか」とまごつく人が多かった。

登下山道には多数の案内表示板があるが、それでも迷う人はいる。吉田ルートの下山中、6合目の分岐点で道を誤る人が相次ぐという。

朝日新聞（2024年7月19日夕刊）

資料1

環境省ホームページ 2023 年（令和5）年度富士山登山者数（詳細版）を加工して作成



資料2

朝日新聞（2024 年 7 月 19 日夕刊）

資料3

「富士登山オフィシャルサイト」より
https://fujisan-climb.jp/for-every-climber.html

山梨県は、令和6年度から、富士山吉田口登下山道（山梨県側）で、登山規制を行います！！

弾丸（だんがん）登山・混雑対策として通行規制を行います

4PM ▸ 3AM

午後4時（16:00）から翌日午前3時（3:00）までの間、五合目（へいさ）の登山道入口ゲートを閉鎖し、通行を規制します。

上限 4,000人／1日

1日の登山者が4,000人に達した場合、通行を規制します。

山小屋に宿泊（しゅくはく）予約済みの方は、規制中も通行可能です。

※山小屋に宿泊予定の方も、原則、規制開始前（午後4時まで）にゲート通過をお願いします。

安全対策等に必要な費用をご負担いただきます

通行料（施設使用料）

（山梨県富士山吉田ルート通行予約システム）

2,000円／1人（1回）

条例に基づき、お支払いが必要です。
※お支払いは現地、または「山梨県富士山吉田ルート通行予約システム」にて受け付けます。

＋

任意 協力金

1,000円／1人

これまで同様、富士山保全協力金のご協力もよろしくお願いいたします。

本規制の情報、登山情報は富士登山オフィシャルサイトへ

環境省・山梨県・静岡県による 富士登山オフィシャルサイト

山梨県

（1） 1 にあてはまる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　1万
イ　5万
ウ　13万
エ　22万
オ　32万

（2） 2 にあてはまる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　吉田ルート
イ　須走（すばしり）ルート
ウ　御殿場（ごてんば）ルート
エ　富士宮（ふじのみや）ルート

（3） 3 にあてはまる最もふさわしい言葉を 資料3 から探し、書きぬきなさい。

（4） 新聞記事と 資料1 ～ 資料3 から、正しいといえるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　通行料は事前決済することもできるが、現地で支払うこともできる。
イ　御殿場ルートは須走ルートに比べて過去10年は常に5割程度しか使用されていない。
ウ　山小屋に宿泊する場合でも午後4時までに登山道入口ゲートを通過することが望ましい。
エ　富士宮ルートは他のルートよりも距離が短いため、体力のない初心者に適している。
オ　ふもとのバス停では多言語の案内表示があるにもかかわらず、道に迷う外国人が多い。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）

その年の十月の初めにぼくは、ある女の子からピアノ演奏会への招待状を受け取った。彼女はぼくよりひとつ学年が下で、同じ先生にピアノを習っていた。一度だけ、モーツァルトの四手のための小品を*1連弾したことがある。でも①ぼくは十六歳のときにピアノのレッスンに通うのをやめて、そのあと彼女とは顔を合わせたこともなかった。なのに今になってなぜ急にそんな集まりに招待されるのか、その理由がわからなかった。ぼくに関心があるのだろうか？　まさか。彼女はぼくの好みの顔立ちではなかったにせよ、いわゆる美形だったし、いつも新しい洒落た服を着て、お金のかかる私立の女子校に通っていた。どう考えても、ぼくみたいなぱっとしない普通の男子に関心を持ったり、思いを寄せたりするタイプではない。

連弾をしているときにぼくが間違いを犯すと、彼女はいつもいやな顔をした。彼女のピアノの腕はぼくより上だったし、おまけにぼくは緊張症だったので、二人で並んでピアノを弾いているとよくミスをした。肘がぶつかりあうこともたまにあった。それほどむずかしい曲ではなかったし、おまけにぼくは易しい方のパートを受け持っていたのだが、それでも。そのたびに彼女は「ほんとにもう」という表情をちらりと浮かべた。小さく――でもちゃんと聞こえるように――舌打ちをすることさえあった。その舌打ちの音を今でも思い出せる。ぼくがそろそろピアノをやめようと決心したのは、その音のせいもあったかもしれない。

いずれにせよ、ぼくと彼女はたまたま同じピアノの教室に通っている生徒というだけの間柄だった。教室で顔があえば挨拶をしたが、親しく個人的な話をした記憶はない。だから彼女から突然*2リサイタル（彼女一人だけではなく、グループの三人合同で開くリサイタルだったが）の招待状が届いたことはぼくにとっては意外な、というか戸惑わせられる出来事だったのだ。でもその年のぼくは、なにしろ暇だけは掃いて捨てるほど持ち合わせていたから、②とりあえず出席の返事の葉書を出しておいた。彼女がなぜ今頃になって突然、自分のピアノ・リサイタルにぼくを招待したのか、そのわけを――もしわけなんてものがあるのなら――知りたかったということも、理由のひとつになっていた。彼女はあれからピアノの腕が更に上がって、それをぼくに見せたいのかもしれない。それともぼくに何か個人的に伝えたいことがあるのかもしれない。要するにぼくは、好奇心というものの正しい扱い方を、あちこち頭をぶっつけながら学習する途上にあったということになるだろう。

（　中略　）

案内状に書かれた地番と簡単な地図を頼りに坂を上っていったが、歩くにつれて、ⓐ漠然とした不吉な予感がぼくの中で膨らんでいった。何かがおかしい――まず人通りがあまりになさすぎる。バスを降りて歩き始めてから、一人の通行人とも出会っていない。二台の車とはすれ違ったが、どれも上から下に降りてくる乗用車だった。もしこのあたりでリサイタルみたいなものが開かれているとすれば、もう少し人の動きがあっていいはず

だ。なのにあたりに人影はなく、すべては深く静まりかえっている。ⓑまるで頭上の分厚い雲が物音をそっくり吸い込んでしまったみたいに。

何かを間違えたのだろうか？

上着のポケットから招待状を引っ張り出して、場所と日時をもう一度確認してみた。うっかり読み違えをしたのかもしれない。しかしどれだけ注意深く読み返しても、間違いはなかった。通りの名前もあっているし、バス停の名前もあっているし、日時もあっている。ぼくは一度深呼吸をして自分を落ち着かせ、それからまた歩き出した。とにかくそのホールまで行ってみるしかない。

ようやく目指す建物に着いたとき、その大きな両開きの鉄扉が固く閉ざされていることがわかった。鉄扉には太い鉄の鎖がぐるぐると巻かれ、巨大な南京錠まではめられていた。まわりに人の気配はない。扉の隙間からまずまずの広さの駐車場が見えたが、そこには一台の車も駐まっていなかった。敷石のあいだから緑の雑草が顔を出しており、駐車場はもう長いあいだ使用されていないように見えた。それでも、門に掲げられている大きな表札は、その建物が間違いなくぼくの目指しているホールであることを告げていた。

門扉についているインターフォンのボタンを押してみたが、誰も出なかった。時間を置いてもう一度押してみたが、やはり返答はない。腕時計に目をやった。リサイタルの開始時刻のもう十五分前になっている。しかし門扉が開かれそうな様子は見えない。鉄の門扉はところどころで塗料がはがれ、錆が浮き始めているようだった。ほかにやることも思いつかないので、念のためにもう一度、前より長くボタンを押してみたが、反応は同じだった——深い沈黙。

どうすればいいのかわからなかったので、重い鉄扉にもたれかかるようにして十分ばかりそこに立っていた。そのうちに誰かが姿を見せるかもしれないという淡い期待を抱いて。しかし誰も現れなかった。扉の内側にも外にも、動きらしいものは見受けられなかった。風はなく、鳥も鳴かず、犬も吠えない。頭上は相変わらず灰色の雲に切れ目なく覆われていた。

そこでぼくはようやくあきらめ（それ以外にいったいなにができただろう？）、重い足取りでもと来た道を戻り始めた。さっき降りたばかりのバス停に向かって。なにがどうなっているのかさっぱり事情がわからなかったが、今日ここでピアノ・リサイタルみたいなものが催されそうにないということだけは明らかだった。赤い花束を手に、このまま家に帰るしかない。きっと母親に「この花束はいったい何なの？」と訊かれるだろうが、適当に返事をするしかない。できれば駅のゴミ箱にでも放り込んでしまいたかったが、ⓒあっさり捨ててしまうには——もちろんぼくにしてみればということだが——値段の張るものだった。

（　中略　）

やがて遠くから人の声が聞こえてきた。③肉声ではなく拡声器を通した声だ。話の内容までは聞き取れなかったが、その誰かはセンテンスをひとつひとつ明瞭に句切り、丁寧に、感情をいっさい込めずに語りかけていた。何かとても大事な事柄を、できるだけ客観的に伝えようとしているみ

たいに。ひょっとしてそれはぼくに（ぼくだけに）向けられた個人的なメッセージかもしれない、ふとそう思った。ぼくの間違いがどこにあったのか、ぼくが何を見落としていたのか、誰かがそれをわざわざ教えにきてくれたのだと。普通に考えればあり得ないことだが、そのときはなぜかそのように思えたのだ。ぼくは耳を澄ませた。声は次第に大きく、聞き取りやすくなってきた。おそらく車の屋根に拡声器を載せ、坂道をゆっくりと上がってきているのだろう（決して先を急いではいないようだ）。

（　中略　）

でも車は現れなかった。拡声器の声はこちらに近づいてくるように思えたのだが、ある時点から急にまた小さく不明瞭になり、そのうちに何も聞こえなくなってしまった。きっとどこかの曲がり角を、こちらではない方向に折れていったのだろう。その車が姿を見せないままどこかに去っていったことで、自分が世界中から見捨てられてしまったような気持ちになった。

④ぼくは彼女にかつがれたのかもしれない、そこではっとそう思った。ⓓどこからともなくそういう考えが頭に浮かんだ――いや、直観したというべきだろうか。彼女は何かしらの理由で――どんな理由だかは思いつけないが――虚偽の情報を与え、日曜日の午後にぼくをこんな山の上まで引っ張り出したのだ。何かがあって、彼女はぼくに対して個人的な怨みなり憎しみを抱くようになったのかもしれない。それともとくに理由もなく、ただ単に我慢できないほどぼくのことを不快に思っていたのかもしれない。それでありもしないリサイタルの招待状を送りつけ、ぼくがだまされるのを見て（というかその滑稽な姿を思い浮かべて）どこかでほくそえんでいるのかもしれない。あるいは大笑いしているのかもしれない。

しかしそれほど手の込んだ嫌がらせを、人はただの悪意からおこなえるものだろうか？　葉書の印刷だって手間はかかったはずだ。そこまで人は意地悪くなれるものだろうか？　彼女に憎まれるようなことをした覚えはぼくにはまるでなかった。でも人は自分では気がつかないところで、他人の気持ちを踏みにじったり、プライドを傷つけたり、不快な思いをさせたりすることがある。そういう考えられなくはない憎しみのいくつかの可能性について、そこにあったかもしれない誤解のいくつかの可能性について考えを巡らせてみたが、どれをとってもぼくとしては納得のいかないものだった。そしてそんなⓔ感情の迷路を収穫もないまま往き来しているうちに、⑤ぼくの意識は目じるしを見失ってしまった。気がつくと呼吸がうまくできなくなっていた。

（　中略　）

ふと気がつくと（*3数をかぞえることに意識を集中していたので、気がつくまでに時間がかかった）、ぼくの前に人の気配があった。誰かの視線が自分にじっと向けられている――そんな感覚があった。ぼくは用心深くそろそろと目を開き、少しだけ顔をあげた。鼓動はまだ少し乱れていた。

⑥*4四阿の向かい側のベンチにいつの間にか一人の老人が腰掛けて、まっすぐこちらを見ていた。十代の少年にとって、老人の年齢を言いあてる

のは簡単なことではない。みんな同じただの老人にしか見えない。六十歳か七十歳、そこにどんな違いがあるだろう？　彼らはぼくらとは違っても、う若くはない――それだけのことだ。老人は痩せた中背で、青灰色の毛糸のカーディガンを着て、茶色のコーデュロイのズボンに、紺色の運動靴を履いていた。どれをとってもそれらが新品であったときから、少なからぬ歳月が経過しているように見える。でもみすぼらしく見えたわけではない。白髪は太くて固そうで、耳の上でいくつかの塊が、水浴びをする鳥の羽根のように跳ね上がっていた。眼鏡はかけていない。いつからいたのかはわからないが、どうやらしばらく前からぼくの姿を観察していたようだ。そういう気配があった。

たぶん「大丈夫か？」みたいなことを尋ねられるのだろうと思った。ぼくはきっと苦しそうに見えたはずだから（実際に苦しかったのだが）。それがその老人を目にして、真っ先に頭に浮かんだことだった。しかし予想に反して彼は何も言わず、何も尋ねず、ただ固く畳まれた黒いコウモリ傘をステッキのように両手にしっかり握っていた。飴色の木製の柄のついた頑丈そうな傘で、いざというときには武器にもなりそうだ。たぶん近所に住む人なのだろう。傘の他にはなにも手にしていなかったから。

そこに座ったままぼくは呼吸を整え、老人は無言のうちにそんな様子を眺めていた。視線はこちらに向けられたまま、いっときも揺らがなかった。ぼくとしては居心地が悪かったし（まるでよその家の庭に無断で入り込んでしまったときのような気がした）、できることなら一刻も早くそのベンチから立ち上がり、バス停に向かって歩き出したかった。しかしなぜかうまく立ち上がれなかった。しばらくそのまま時間が経過した。それから老人が唐突に口を開いた。

「中心がいくつもある円や」

ぼくはまっすぐ顔をあげて、相手の顔を見た。目と目が合った。額がいやに広く、鼻が尖っていることがわかった。まるで鳥のくちばしのように鋭く尖っている。ぼくが何も言えずにいると、老人は同じ言葉をやはり静かな声で繰り返した。「中心がいくつもある円や」

彼が何を言おうとしているのか、もちろんぼくにはわからなかった。ひょっとしてこの男が[*5]さっきのキリスト教の車を運転していたのではあるまいかと、ふと思った。そのへんに車を停めて、ここで一服しているのではないのか？　いや、そんなわけはない。声が違いすぎる。拡声器の声はもっと若い男の声だった。あるいはそれはテープの声だったのかもしれないが。

「円ですか？」とぼくは仕方なく声に出して尋ねた。相手は年上の人だし、返事もせず黙り込んでいるわけにはいかない。

「中心がいくつもあってやな、いや、ときとして無数にあってやな、しかも外周を持たない円のことや」と老人は額のしわを深めて言った。「そういう円を、きみは思い浮かべられるか？」

頭はまだうまく働かなかったが、礼儀としていちおう考えを巡らせてみた。中心がいくつもあって、しかも外周を持たない円。でもそんなものを思い描くことはできなかった。

「わかりません」とぼくは言った。
老人は無言のままじっとこちらを見ていた。もう少しまともな意見が返ってくるのを待っているみたいに。
「そんな円のことは数学の授業では習わなかったと思うし」とぼくは力なく付け加えた。
老人はゆっくりと首を振った。「ああ、もちろんや。あたりまえのことや。学校ではそんなことは教えてくれへんからな。ほんまに大事なことはな、学校なんかではまず教えてくれんのや。きみも知ってのとおり」
ぼくも知ってのとおり？　どうしてそんなことがこの老人にわかるのだろう？
「そんな円が本当に実際にあるのですか？」とぼくは尋ねた。
「もちろんある」と老人は言って、何度か肯いた。「そういう円はちゃんと存在する。しかし誰にでも見えるわけやない」
「あなたには見えるのですか？」
老人は返事をしなかった。ぼくの質問はしばらくぎこちなく空中に浮かんでいたが、やがて霞んで消えていった。
老人は言った。「ええか、きみは自分ひとりだけの力で想像せなならん。しっかりと智恵をしぼって思い浮かべるのや。中心がいくつもあり、しかも外周を持たない円を。そういう血のにじむような真剣な努力があり、そこで初めてそれがどういうもんかだんだんに見えてくるのや」
「むずかしそうですね」とぼくは言った。
「あたりまえや」と老人は何か固いものでも吐き捨てるように言った。「この世の中、なにかしら価値のあることで、手に入れるのがむずかしうないことなんかひとつもあるかい」。そして文章の改行でもするみたいに簡潔にひとつ咳払いをした。「けどな、時間をかけて手間を掛けて、そのむずかしいことを成し遂げたときにな、それがそのまま人生のクリームになるんや」
「クリーム？」
「フランス語に『クレム・ド・ラ・クレム』という表現があるが、知ってるか？」
知らないとぼくは言った。フランス語のことなんてぼくは何も知らない。
「クリームの中のクリーム、とびっきり最良のものという意味や。人生のいちばん大事なエッセンス――それが『クレム・ド・ラ・クレム』なんや。わかるか？　それ以外はな、みんなしょうもないつまらんことばっかりや」
その老人が何を言っているのか、そのときのぼくにはよくわからなかった。クレム・ド・ラ・クレム？
「さあ、考えなさい」と老人は言った。「もう一回目をつぶってな、とっくり考えるんや。中心がいくつもあって、しかも外周を持たない円のことを。きみの頭はな、むずかしいことを考えるためにある。わからんことをなんとかわかるようにするためにある。ⓕへなへなと怠けてたらあかん

ぞ。今が大事なときなんや。脳味噌と心が固められ、つくられていく時期やからな」

ぼくはもう一度目を閉じ、その円を頭に思い浮かべようと努めた。へなへなと怠けているわけにはいかない。中心がいくつもあって、しかも外周を持たない円のことを考えなくてはならない。でもいくら真剣に考えても、そのときのぼくにはその意味がまったく理解できなかった。ぼくの知っている円とは、中心をひとつだけ持ち、そこから等距離にある点を繋いだ、曲線の外周を持つ図形だった。コンパスで描ける単純な図形だ。老人の言っていることは、そもそも円の定義にまったく添っていないではないか？

しかしその老人の頭がおかしいとは思えなかった。ぼくをからかっているとも思えなかった。彼は今ここで、なにか大切なことをぼくに伝えようとしているのだ。どうしてかはわからないが、ぼくにはそれが理解できた。だからなおも必死に考え続けた。でもどれだけ考えても、頭は同じところをぐるぐる回っているだけだった。中心をいくつも（あるいは無数に）持つ円が、どうやって一個の円として存在しうるのだろう？　それは高等な哲学的比喩のようなものなのだろうか？　ぼくはあきらめて目を開けた。もっと多くの手がかりが必要とされていた。

しかし老人の姿はもうそこにはなかった。あたりを見回してみたが、人影らしきものはどこにも見えなかった。もともとそんな人物は存在もしなかったみたいに。ぼくは幻を見ていたのだろうか？　いや、それはもちろん幻なんかじゃない。彼は間違いなく目の前にいて、雨傘を堅く握りしめ、静かな声でぼくに語りかけ、不可思議な問いかけをあとに残していったのだ。

気がついたとき、ぼくは普段の穏やかな呼吸を取り戻していた。急流はもうどこかに去っていた。港の上空で、それまで空を覆っていた密な灰色の雲がところどころで途切れ始めていた。ⓖ小さく開いた雲の隙間から一条の光が差し、クレーンのハウスのアルミニウムの屋根を輝かせた。まるでその一点に正確に狙いをあわせたかのように。ぼくは神話的とも言えそうなその印象深い光景を、長いあいだ飽きもせず見つめていた。

ぼくの隣にはセロファンに包まれた赤い小さな花束が置かれていた。その日ぼくの身に起こった一連の奇妙な出来事のささやかな証拠品みたいに。どうしようかと迷ったが結局、花束は四阿のベンチに残していくことにした。そうするのがいちばん正しいだろうという気がして。ぼくは立ち上がり、さっき降りたバスの停留所に向けて歩き出した。少し風が出てきたようだった。その風が頭上に淀んでいた雲を散らせたのだ。

（　中略　）

これまでの人生で、説明もつかないし筋も通らない、しかし心を深く激しく乱される出来事が持ち上がるたびに（しばしばとまでは言わないが、何度かそういうことがあった）、ぼくはいつもその円について――中心がいくつもあって外周を持たない円について――考えを巡らせた。十八歳のときあの四阿のベンチでそうしたのと同じように、目をつぶり心臓の鼓動に耳を澄ませて。

それがどういうものかおおよそ理解できたような気がすることもあったが、更に深く考えていくとまたわからなくなった。その繰り返しだ。でもそれはおそらく具体的な図形としての円ではなく、人の意識の中にのみ存在する円なのだろう。ぼくはそう思う。たとえば心から人を愛したり、何

かに深い憐れみを感じたり、この世界のあり方についての理想を抱いたり、信仰（あるいは信仰に似たもの）を見いだしたりするとき、ぼくらはとても当たり前にその円のありようを理解し、受け容れることになるのではないか――それはあくまでぼくの漠然とした推論に過ぎないわけだけれど。

きみの頭はな、むずかしいことを考えるためにある。わからんことをわかるようにするためにある。それがそのまま人生のクリームになるんや。それ以外はな、みんなしょうもないつまらんことばっかりや。白髪の老人はそう言った。秋の終わりの曇った日曜日の午後、神戸の山の上で。ぼくはそのとき小さな赤い花束を手にしていた。そして今でもまだ、何かがあるたびにぼくはその特別な円について、あるいはしょうもないつまらんことについて、そしてまた自分の中にあるはずの特別なクリームについて思いを巡らせ続けているのだ。

（村上春樹『一人称単数』所収、「クリーム」）

注　＊1連弾……一台のピアノを二人で演奏すること。二人がそれぞれ両手を用いるため、四手連弾とも呼ばれる。

＊2リサイタル……単独、または少人数の演奏会。

＊3数をかぞえる……呼吸を整えるために、意識の中に浮かんでは消える図形をかぞえている。

＊4四阿……庭園などに景色をながめたり、休けいなどしたりする目的で設置された簡素な小屋。

＊5さっきのキリスト教の車……拡声器を載せた車のこと。

問一　――線部①「ぼくは十六歳のときにピアノのレッスンに通うのをやめて」とありますが、その理由の一つとして考えられる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ピアノの演奏に対する関心がもともと十分にあったわけではなかったところに、容姿と家庭環境に恵まれた彼女との一件があり、もはやとりえのない自分が彼女と平穏な関係を築けるわけもなく、自然とレッスンを続ける意欲を失ってしまったから。

イ　演奏中にミスを犯すたびに彼女からの冷ややかな反応がプレッシャーとなり、その繰り返しが「ぼく」に精神的な負担を与え、レッスンを続ける意欲を損なう結果にもなっていたから。

ウ　恵まれた家庭環境の中で私立の女子校に通う彼女とは異なり、家計の負担も考慮し、経済的な理由からレッスンの継続が困難になったため、やむを得ず中断する決断を下したから。

エ　ピアノの練習に割ける時間が著しく減少したことで、彼女に迷惑をかけずに演奏することができるまでの技量が上がらず、結果的にレッスンを継続する意義を少しずつ見失ってしまったから。

問二　――線部②「とりあえず出席の返事の葉書を出しておいた」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　彼女のピアノ技術がどれほど向上したのかを見届けたいという純粋な興味がわき、その成果を自分自身の目で確かめたい気持ちがあったので、リサイタルの招待に応じることにしたから。

イ　暇を持て余していたこともあるが、それ以上に彼女が非常に魅力的な人物であり、ふたたびお互いの関係を深めたいという願望が動機となり、リサイタルへの出席を決めたから。

ウ　日々の生活において特に予定がなく、自分が持て余している時間を消化する手段としてでもあるが、彼女が招待状を送ったわけそのものにも関心を抱いたため出席を決めたから。

エ　招待状を送ってくれた彼女に対する礼儀を重んじ、せっかくの案内に応じないことが失礼だと感じて、まずはとりあえず出席することに決めたから。

問三　招待されたピアノ・リサイタルの当日、バスを降りてから「ぼく」が抱いた感情として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ただ会場の準備が遅れているだけだろうと冷静に判断し、特に慌てずにしばらく待ち、あとの状況に応じられるようにしようと落ち着いた気持ちを保とうとしていた。

イ　彼女からの招待状が本物ではないのではないかという疑念がわき上がり、自分はだまされたのではないかと強く疑い、心配すると同時に少しずつ怒りの気持ちが生じていた。

ウ　他の出席者がまだ到着していないだけで、自分はしっかり招待状に書かれている日時や場所を確認して到着したので正しいと確信し、安堵して静かに様子をうかがう気持ちになろうとしていた。

エ　会場の門が固く閉ざされ、人通りもなく不自然な静けさが漂っていたため、自分の知らない何か特別な状況になっているのではないかという不安と疑念を感じていた。

問四　――線部③「肉声ではなく拡声器を通した声だ」とありますが、拡声器の声を聞いているときの「ぼく」の心情として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　声が徐々（じょじょ）に大きくなり、車が近づいてくるのを感じる一方で、今までに経験したことのない不安から落ち着きのなさを感じている。

イ　拡声器の声が遠くから届くのを聞き、手がかりのない様子に戸惑う自分に、それとなく教え示すことばを送ってくれていると感じている。

ウ　拡声器の声が、丁寧に感情を込めずに客観的に語られていることから、実際にはあり得ない出来事だと冷静に受け止めている。

エ　拡声器を通して語るだけで、なぜ車の運転手は直接自分に大事な事柄を伝えないのかという疑問と焦（あせ）りを覚えている。

問五　――線部④「ぼくは彼女にかつがれたのかもしれない、そこではっとそう思った」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　すぐに理由を説明することはできないものの、ただの思いつきとは異なり、その時の自分の置かれた状況を認識してすぐさまに感じたこと。

イ　車が現れなかったことに対する落胆（らくたん）から立ち直るために、彼女が何らかの理由で自分に対する嫌がらせを計画していたと推測したこと。

ウ　拡声器の声が消えたのは彼女がリサイタルを中止したことと関係があると考え、招待状が虚偽であったのかもしれないと疑ったこと。

エ　声が不明瞭になった理由を技術的な問題だと考え、彼女の意図ではないと信じながらも、そう結論づけなければつじつまが合わなかったこと。

問六　――線部⑤「ぼくの意識は目じるしを見失ってしまった」とありますが、その理由として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　彼女が自分に対して悪意を持ち、わざと虚偽の情報を送りつける手間をかけることができるかどうかについて考えたが、結論を見出すことができなかったから。

イ　彼女に対する想像を深めていく中で、人が抱く悪意や、そこからおこなう行動の根源について考えていったが、その本質的な部分への答えを出すことができなかったから。

ウ　リサイタルの招待に足を運び花束まで用意した自分に対して、感謝の気持ちさえ持っていないであろう彼女の心情を徹底的に検討したが、想像しきれなかったから。

エ　彼女に対して嫌なことをした覚えはないが、気づかないところで彼女に怨みや憎しみを抱かせてしまったような誤解の可能性を考えてみても、腑に落ちる理由はどこにもなかったから。

問七　――線部⑥「四阿の向かい側のベンチにいつの間にか一人の老人が腰掛けて、まっすぐこちらを見ていた」とありますが、このあと老人と言葉を交わす中で、「ぼく」はどのようなことを考えていましたか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　老人が問いかけた「中心がいくつもある円」が、数学的な理論や概念を説明しているのではないかと捉えようとしながらも、謎めいた言葉の背後にある深い意味を考えていた。

イ　老人の言葉は自分の考えに対する挑戦と感じつつ、深遠な意味がこめられていそうな「中心がいくつもある円」とは、実際には意味を持たないことを表す哲学的な比喩なのではないかと考えていた。

ウ　老人がリサイタルの関係者である可能性を否定することができないため、老人が自分に何か重要な情報を伝え、「中心がいくつもある円」を教えることによって、この先の行動の仕方を案内してくれるのではないかとかすかな期待を寄せていた。

エ　老人が語る「中心がいくつもある円」とは、自分の人生における真の意義の選択肢の豊富さや可能性を示していると捉え、これからの生きる目標を真剣に考えていた。

問八　次の先生と生徒のやりとりを読み、後の（1）～（3）の問いに答えなさい。

先生　この小説を読み終えて、どのような感想を持ちましたか。

生徒A　物語の展開に多くの謎があるように感じました。主人公の「ぼく」が後年まで考えていた「老人」の言葉の意味は一体なんであったのかということについても、深く考えてしまいました。

生徒B　ピアノ・リサイタルの招待は「ある女の子」のいたずらだったのか、また、あの「老人」は突然現れて、突然消えていったのはなぜだったのかなど、確かに疑問がいくつも残りました。

先生　ここでいくつかの事柄を整理してみようと思います。次の電子黒板のスライドを見ていきましょう。

スライド１

状況

ピアノ・リサイタル

⇐

（案内状のとおりには）催されない

↓途方（とほう）に暮れる

＊〈「ぼく」が何を、どのように考えたのか〉に注目

Ａ　車に載せられた拡声器の声

↓　ぼくに向けられた個人的なメッセージ

①間違いがどこにあったのか

②何を見落としていたのか

スライド２

直観――彼女にだまされる（個人的な怨みや憎しみ、

または自分を不快に思っていた）

〈一方〉

考察――人は気づかないところで、気持ちを踏みにじったり、

プライドを傷つけたりすることがある

Ｂ

「老人」の存在や言葉

↓　なにか大切なことを伝えようとしている

①自分で想像し、知恵をしぼりなさい

②必死で考えたのちに、姿は消える

（もともと存在しなかったみたいに）

生徒Ｃ　スライドを見て気づいたことは、「ぼく」にとって不可解な出来事が物語を展開させる大きな発端（ほったん）になっていたのだな、ということでした。そして、「拡声器の声」や「老人」の言葉は、自分自身に目を向け、物事を深く考えていくことの大切さのようなものが感じられました。

先生　そうですね、Ｃさんが言うように、［Ｗ］に物事をとらえようとする「ぼく」の姿が見て取れますね。

生徒Ａ　先生、謎の言葉を残した「老人」は、もしかしたら「ぼく」の心の中に存在していた人物という考え方はできませんか。本文にこういう部分がありました。

「ほんまに大事なことはな、学校なんかではまず教えてくれへんのや。きみも知ってのとおり」

「ぼくも知ってのとおり？　どうしてそんなことがこの老人にわかるのだろう？」

先生　「ぼく」の心の中のことを最もよく知っている人物は誰かといえば、それは確かに自分自身と言えるかもしれませんね。そう考えるなら、Ａさんが指摘してくれたことというのは、この小説の読み方の可能性を深めてくれる部分の一つと言えるかもしれません。

生徒Ｂ　「中心がいくつもあり、外周を持たない円」とは、何を意味していたのでしょうか？

生徒Ｃ　「ぼく」は後にこう考えていましたね、「具体的な図形としての円ではなく、人の意識の中にのみ存在する円なのだろう」と。

生徒Ａ　「老人」が言っていた円は、［Ｘ］に目に見えて存在したり、数学的に説明したりできる個別のものではなく、言葉を超えた様々なことが無数につながり合ったりする［Ｙ］な存在なのかもしれません。だから、「ぼく」が推論したように、円の存在を受け容れるというのは、人を愛したり、深い憐れみを感じたりすることにつながる存在といえるのかもしれないと思いました。

先生　なるほど、そうですね。［Ｚ］を「人生のクリーム」と表現しているのかもしれません。だから「クリーム」とは、ふつう［Ｘ］なものを表す言葉だけれども、この小説では［Ｙ］なものに名前を付して表したものとしてとらえてみるならば、読者のわたしたち一人ひとりも、自分の「特別なクリーム」の存在に思いを巡らしていくことは、意義のあることとして大切にとらえていきたいですね。

（1）［Ｗ］に入る最もふさわしい言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア　客観的　　イ　主観的　　ウ　自制的

エ　内省的　　オ　内向的

（2）［Ｘ］・［Ｙ］に入る最もふさわしい言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　対象的　　イ　感覚的　　ウ　論理的　　エ　抽象的

オ　幻想的　　カ　現実的　　キ　具体的　　ク　庶民的

（3）［Ｚ］に入る最もふさわしい言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア　実際の成功や物質的な成果を懸命に求め続ける過程で発見できる、人生の目標や達成感など

イ　日常の些細な幸せや楽しみを見つけることを通じて得られる、人生の究極的な満足感など

ウ　人生についての哲学的な思索や幼いころからの夢を発展させることで発見できる、自己実現や自己満足など

エ　人生の本質的な価値や意味を探求しその先に得られる、精神的な理解や充実など

問九　本文で使われている表現や内容の説明として、ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　――線部ⓐ「漠然とした不吉な予感がぼくの中で膨らんでいった」や、――線部ⓑ「まるで頭上の分厚い雲が物音をそっくり吸い込んでしまったみたいに」で使われている表現は、「ぼく」の心情を分かりやすい他のものに直接たとえる比喩方法を用いて、読者がイメージしやすくなるように工夫されている。

イ　――線部ⓒ「あっさり捨ててしまうには――もちろんぼくにしてみればということだが――値段の張るものだった」や、――線部ⓓ「どこからともなくそういう考えが頭に浮かんだ――いや、直観したというべきだろうか」には、「――」（ダッシュ）の記号が用いられているが、ⓒでは先に述べた内容が、二つ目の「――」以下の内容に対する補足的な説明となっており、ⓓでは先に述べた内容を「――」以下で、再考した内容に言いかえている。

ウ　――線部ⓕ「へなへなと怠けてたらあかんぞ」のように、老人が話す方言や言い回しに着目してみると、物語の展開において独特のリズムを生むと同時に、初対面にもかかわらず老人の語る言葉や存在が「ぼく」の心の壁を押し下げ、心中に踏みこみやすくさせる効果を上げている。

エ　――線部ⓖ「小さく開いた雲の隙間から一条の光が差し、クレーンのハウスのアルミニウムの屋根を輝かせた」の部分は、――線部ⓔ「感情の迷路を収穫もないまま往き来している」主人公が、混迷していた精神状態から、老人の不思議な問いかけのやり取りの後に、精神の不安から少しずつ抜け出し、回復していく状況が分かる描写といえる。

A 三

次のA～Cの文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）

冬の時期、こう言って良ければ、庭園は見た目としてはもっとも渋い。もちろん、雪によって白一面となった庭の美しさにまさるものはない。しかし、木々の葉はほとんど落ち、めったに花が咲くこともなく、芝生も枯れた茶系の色となる。木々はほぼ丸裸になることによって、その奥が見通せるようになり、ずいぶんと庭園の風景の印象は変わる。①庭園そのものの有する容積がもっとも萎縮し、色彩の＊レンジが最小になるのが冬である。

しかし、春になると再び植物は芽吹きはじめ、新しい葉を身につけ、花が咲きはじめる。今日であれば、やはり梅、桜が見どころとなるだろう。こうして庭園は再び容積を増やしてゆき、色彩もまた豊かになる。

そして、夏になれば庭園の容積は最大になる。木々は瑞々しい緑の葉に満たされ、芝生も青々となる。

ところが、秋になるとまた植物による庭園の容積は再び小さくなってゆく。少しずつ葉の色が変わり、ところどころ落ちてゆくようになる。庭園の手入れにとってはとくに大変な時期である。そして、植物たちは燃え上がるような紅葉に満ちてゆき最期の輝きを見せるが、それも再び落葉し、また冬の庭園になる。

こうした四季の循環が庭園のなかで毎年繰り返されてゆく。②石という時間変化を全くと言って良いほど持たないものと、刻一刻と流れてゆく水のはざまで、毎年、こうした植物たちのパフォーマンスが繰り返されるのが日本庭園である。しかし、それは当然ながら、同一の循環ではない。毎年、大方類似した循環で変化しながらも、その年ごとに開花時期が異なるほか、一つ一つの植物は成長し、ものによっては枯死してしまう。また風や虫、鳥などを経由していつの間にか、そこに思いがけず新たな植物が加わることもある。木々の変化は、庭園の風景に大きな影響を及ぼす。それなりの時間が経過した庭園の場合、木々そのものの成長の変化は著しい。それによって、かつては園外の風景が見えたものが、今日は木々の成長によって閉ざされた庭となった事例はしばしば見られる。③龍安寺石庭などもその一例である。現在、縁側から石庭に目を向けたとき庭園の外の風景は見えないが、かつては京都の山々を見渡すことのできる借景の庭だったと言われている。④毎年の循環的変化は、同一の円環を描き続けるというより、螺旋的に拡大してゆくものと捉えられる。

縁側から見た龍安寺石庭

B

*2その三島が、一九六七年に京都仙洞御所を訪れて書いた文章がある。これはその翌年に淡交新社から出版された『宮廷の庭Ⅰ――仙洞御所』という写真集に付せられた文章である。この文章は、数ある日本庭園についての評論文のなかでももっとも優れたものの一つと思われる。そこでは仙洞御所の庭をめぐりながら、三島ならではの*3レトリックに満ちた文章で庭の細部を描き、そこから多くの魅力的な論理を導き出している。それが「終わらない庭」である。

先に、複数人で庭を歩くことの面白さについて触れたが、対して、これから取り上げる文章は、どうやら三島が一人で仙洞御所の庭を歩きながら思索をめぐらす設定で書かれているようである。その思索の中では「時間」がキーワードとなっている。ここでしばしば三島は、庭園を「音楽」に喩えている。

三島は、鼓常良による『西洋の庭園』（一九六一）を参考にしながら、日本庭園と西洋の庭園、それもフランスのヴェルサイユ庭園との比較を行っている。そこで三島は、⑤ヴェルサイユの庭には「時間」の要素が導入されず、それが老いてゆくことは嫌われたとする。

時間を庭へ導入することを、西洋の造園術は思ひつかなかつた。もし時間の原理を導入すれば、形態は腐蝕され、秩序は崩壊し、モニュメントは無効になるであらうからである。立木はたえず時間の影響をうけて変形するので、その刈り込みは庭師の多忙な仕事であつたが、樹々は配列も形態も、彫刻同様にはつきり反自然的なものであらねばならなかつた。

庭がどこかで終る、庭には必ず果てがある、といふ観念は、西洋の専制君主にとつては、我慢ならぬものであつたに相違ない。

（「仙洞御所「序文」」）

これに対して、日本には、時代を通じて、権力そのものの具現であるような庭の形式はかつてなく、むしろ日本の庭は「権力否定の場」だと言う。そしてこう述べている。

おそらく日本の庭の持つ秘密は、「終らない庭」「果てしのない庭」の発明にあつて、それは時間の流れを庭に導入したことによるのではないか。

（同）

ヴェルサイユの庭において、時間が流れないわけではない。しかし、そこはあまりに広大であるため「いくら歩くのに時間がかかっても、われわれは、時のない場所を歩いてゐるといふ感覚を捨てることはできない」と三島は記している。先の引用のように、それが時間によって変化してゆくことは嫌われ、むしろ時間の流れは極力止められる。時間変化を許すことは、それがいつか「終る」こと、「果て」に到達することを意味する。それに対して、日本の庭園は「時間の流れ」を肯定する。そしてその変化に「終り」や「果て」はないと三島は言う。

（　中略　）

さらに、三島がここで注目するのは橋である。橋もまた、三島において重要な*4モティーフで、「橋づくし」（一九五六）という数ある三島の短篇のなかでも傑作と言われる作品がある。

先に触れなかったが、橋は日本庭園を構成する重要な人工物の一つである。それは隔てられた二点を接続するとともに、その二点間からの眺望を体験可能にする。と同時にそれは移動機能をもたらすだけでなく、見られるものとして、風景にアクセントを与える役割も担う。

三島は、橋を西洋式庭園の大階段と比較する。階段――それは古くは「きざはし」と言われた――の両端には［　6　］関係が生じる。しかし、橋においてはそのような関係は生じず、それが接続する*5「此岸」と*6「彼岸」は、一方から渡るときと、その逆方向に渡るときで入れ替わる。そこで「庭をめぐる時間」は「可逆性を持つことになる」と三島は言う。「われわれはその橋を渡って、［　7　］へゆくこともでき、［　8　］へ立ち戻ることもでき、しかも橋を央にして、未来と過去とはいつでも交換可能なものとなるのだ」と。すなわちAという地点からBという地点へ橋を渡るとき、Aが［　9　］になり、Bが［１０］となる。ところが、橋を渡ってBの地点へ着いてから振り返ると、今度はAが未来になるということである。このように橋がつなぐ「此岸」と「彼岸」、「過去」と「未来」という両端は、いくらでも交換可能なものとなる。

（　中略　）

要するに、三島の言う「終らない庭」のコンセプトのポイントは二つある。一つは、日本の庭では、時間変化、老いていくことが肯定されており、その変化は果てしないということである。たとえ創建当初に先行していた建築が焼亡しようとも、庭は生き残る。言わば、庭園全体のマクロな時間の永続性である。鈴木博之氏による「庭は建物より長生きするのかもしれない」という言葉が思い出される。先に『万葉集』から嶋宮において草壁皇子を偲んだ和歌を見たが、こうした永続性ゆえに、庭は、人を偲ぶ場ともなった。

もう一つは、その庭を体験する一人一人における、言わばミクロな時間の永続性である。要するに、その庭の体験には「はじめ」も「終り」もない。橋を渡って「こちら」から「あちら」に行くことは、一見、未来へ向かうように思われるが、すぐに先ほどまで「こ

ちら」だったものが、今度は「あちら」、すなわち未来となる。このように庭の体験は「終り」のないものとなる。人はただ、それを中断して園外に出るしかない。

C

露地は、待合から茶室へと導く庭の小道だが、これも、瞑想の第一段階すなわち自己の目覚めへの移行を促すものだ。外界とのつながりを断ち、新鮮な感受性を呼び覚まして、茶室での美的体験を存分に味わえるように備えさせるのである。この庭の小道に足を踏み入れた者は忘れることのできない思いにうたれる――ほの暗い緑の中に枯れ松葉が散らばり、てんでんばらばらのように見えながら不思議と調和を感じさせる飛び石を伝い、苔むした灯籠の脇をぬけて進んでいくうちに、しだいに俗念が払われ、精神が飛翔していくのだ。街なかにあっても、文明の埃と*7喧噪を遠く離れた森の中にいるような心もちになる。

（　中略　）

こうして心を整えたうえで客は静かに茶室という聖域に近づいていく。客が侍であるなら、刀を軒下の刀掛けにかけなければならない。茶室は格別に平和を尊ぶ空間であるからだ。ついで彼は身をかがめ、高さにして一メートルもない小さな入り口をくぐり抜け、室内に入る。この作法は、身分の上下にかかわりなく、すべての客に課されるもので、謙譲の心を自覚させるためのものだ。待合で待っていた間に話しあって決めた順にしたがって、客たちはひとりずつ、音をたてずに入ると、各々の席につき、まず、床の間の掛け軸や花を拝見する。すべての客が着席し、ひっそりと静まりかえる中、ただ鉄の釜に湯の沸く音だけが聞こえるようになったところで、ようやく*8亭主が入ってくる。釜の底には鉄片が置かれていて、湯がたぎるのにあわせて霊妙な調べを奏でるようになっており、その調べに、客たちは、思い思いに、雲に包まれた滝の響き、遠くの海から聞こえてくる岩に砕ける波の音、竹林を払う風雨の響き、どこかはるかな山の松林の鳴る音などを聞き分けるのである。

日中でも、茶室の中はほの暗い。屋根が傾斜して軒が低く、わずかな日の光しか通さないからである。天井から床まで室内はすべて渋い色合いに整えられている。客たちも注意して地味な色合いの衣服をまとってくる。すべての調度は年を経てまろみを帯びたものに統一され、新品めいた物は禁忌とされている。唯一の例外は、竹の*9柄杓と麻の*10茶巾で、これだけはしみひとつない真っ白で、⑪まっさらなものでなければならず、ほかの調度と鮮やかな対照を示している。茶室にせよ、茶道具にせよ、色あせてはいても、徹底して清潔でなければならない。どんな暗がりといえども塵ひとつあってはならない。そんなことがあれば、亭主はもはや茶人とはいえない。茶の*11宗匠であるための基本条件のひとつはどう掃き清め、洗うかを心得ていることである。清掃にも技があるのだ。年代

物の金属製品などはオランダの主婦のように無闇に力を入れて磨きたてればよいというものではない。花瓶から滴る雫はぬぐってしまってはならない。すずしげな露を思わせるからである。

これについては、＊12利休に、茶人の考える清潔さというものがどんなものかをうかがわせるエピソードがある。ある時、利休は息子の少庵が露地を掃いて水をうっているのを眺めていたが、少庵が作業を終えると「まだ十分ではない」と言って、もう一度やるよう命じた。そこで少庵はまた一時間ほどもやり直して、すっかり疲れ果て、こう利休に言った。

「父上、これ以上はもうすることがありません。飛び石は三度も洗いましたし、石灯籠や木立にも十分に水をやりました。苔は青々としていますし、地面に一本の枝も、一枚の葉も落ちてはいません」

すると、利休は「未熟者」と叱りつけた。

「露地というものはそんな風に掃くものではない」

こう言って利休は庭に降り立つと、一本の木をゆすり、庭一面に、⑫秋の錦を切れ切れにしたような金と朱の葉を撒き散らした。利休が求めたのは単なる清潔ということではなくて、美しく自然らしいということだったのである。

待合から露地、茶室を見たところ

C　A・B

（原　瑠璃彦『日本庭園をめぐる　デジタル・アーカイヴの可能性』（岡倉天心著・大久保喬樹訳『新訳　茶の本』）

注

＊1レンジ……分布する幅。
＊2その三島……作家の三島由紀夫のこと。
＊3レトリック……表現のたくみな言葉。
＊4モティーフ……創作の動機となる大切な思想や題材。
＊5此岸……こちらの岸。
＊6彼岸……向こうの岸。
＊7喧噪……声や物音がやかましいこと。
＊8亭主……茶会を主催する人。主人。
＊9柄杓……湯や水をくむ道具。
＊10茶巾……茶碗をふく布。
＊11宗匠……師匠。
＊12利休……千利休。安土桃山時代の茶人。

Ａの文章について答えなさい。

問一　――線部①「庭園そのものの有する容積がもっとも萎縮し」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　庭園の木々の葉が枯れて落ちてしまうということ。
イ　庭園の無駄が省かれ洗練された印象になるということ。
ウ　庭園の中の動植物のうち植物の割合が減るということ。
エ　庭園の面積そのものが小さくなるような錯覚に陥ること。

問二　――線部②「石という時間変化を全くと言って良いほど持たないものと、刻一刻と流れてゆく水のはざまで、毎年、こうした植物たちのパフォーマンスが繰り返されるのが日本庭園である」の部分を次のようにまとめた場合、（ａ）～（ｄ）に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを後から選び、記号で答えなさい。

変化　小	（ａ）　変化しない
←	（ｂ）　（　ｄ　）
変化　大	（ｃ）　変化し続ける

ア　ａ　水　　ｂ　植物　　ｃ　石　　ｄ　植物が主役となるドラマティックな変化をする。
イ　ａ　石　　ｂ　水　　ｃ　植物　　ｄ　自然の神秘を思い知らされるような変化をする。
ウ　ａ　石　　ｂ　植物　　ｃ　水　　ｄ　繰り返しのようでありつつ単調でない変化をする。
エ　ａ　石　　ｂ　植物　　ｃ　水　　ｄ　予定調和的で安心感を覚えるような変化をする。

問三　――線部③「龍安寺石庭などもその一例である。現在、縁側から石庭に目を向けたとき庭園の外の風景は見えないが、かつては京都の山々を見渡すことのできる借景の庭だったと言われている」とありますが、「借景」とはどのようなことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　現在の庭園の外にある山々まで、かつては寺の敷地（しきち）であるほど広大な庭だったということ。
イ　かつては庭園の外にある山々までも庭の構成要素として取り入れていたということ。
ウ　庭園の外の山々が見えたことにより、庭園の内側には石を置くだけで良かったということ。
エ　現在のような閉鎖（へいさ）的な空間ではなく、かつては開放感に満ちた大空間が広がっていたということ。
オ　かつては遠くの山々を見ながら自然を感じ瞑想することができた神聖な庭だったということ。

問四　――線部④「毎年の循環的変化は、同一の円環を描き続けるというより、螺旋的に拡大してゆくものと捉えられる」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　規則的に同じ状態を繰り返すということではなく、より周囲への影響が大きくなっていくということ。
イ　単調に同じ状態を繰り返すということではなく、規模の変化を楽しめる状態であるということ。
ウ　規則的に同じ状態を繰り返すということではなく、年々ダイナミックな変貌（へんぼう）を遂（と）げていくということ。
エ　単調に同じ状態を繰り返すということではなく、よく観察するとその中身は変わっているということ。
オ　単純に同じ状態を繰り返すというのではなく、枯れる植物もあるが全体としては伸びているということ。

Ｂ の文章について答えなさい。

問五　――線部⑤「ヴェルサイユの庭には『時間』の要素が導入されず、それが老いてゆくことは嫌われた」とありますが、どういうことですか。ふさわしいものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　ヴェルサイユの立派な庭は王の権力（しんりょく）を象徴するものなので、衰（おとろ）えたり乱れたりせず永久に不変である必要があった。
イ　ヴェルサイユの立派な庭は王の信仰心と神に対する従順さの象徴であるので、人工的にする必要があった。
ウ　ヴェルサイユの立派な庭における庭師の仕事は、自然の変化にさからい伸びる枝を切って人工的な形に整えることだった。
エ　ヴェルサイユの立派な庭は王の権力と文化の高さを示すものとして自然を使わず樹木も彫刻によって表現されていた。

問六　[6]に入る最もふさわしい二字の熟語を、[C]の文章中から書きぬきなさい。

問七　[7]～[10]に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　7　過去　8　未来　9　過去　10　未来
イ　7　未来　8　過去　9　過去　10　未来
ウ　7　未来　8　過去　9　未来　10　過去
エ　7　過去　8　未来　9　未来　10　過去

問八　[B]の文章について、次のようにまとめた場合、[a]・[b]に入るものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

西洋の庭	日本の庭
時間による変化を嫌う ＝ [a]	時間の流れを肯定する ＝ [b]

ア　変化しながら存在し続ける
イ　変化していつか失われる
ウ　未来まで決して変わることがない
エ　常に同じ状態を保とうとする

[C]の文章について答えなさい。

問九　――線部⑪「まっさら」の意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　まったく新しく、使われていないこと。
イ　念入(ねんい)りに洗われて清潔(せいけつ)であること。
ウ　余計な模様や装飾がなく純白であること。
エ　しわやゆがみがなく、直線で構成されていること。

問十　――線部⑫「秋の錦」とは何を表した比喩（ひゆ）表現ですか。Aの文章中から漢字二字で書きぬきなさい。

問十一　本文の内容と合致しているものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　茶室は滝の音や波の音、竹林や松林をわたる風の音が聴（き）こえるような大自然の中に作らなくてはならない。
イ　茶室に続く露地を歩いていくと地位や立場などの世間的なこだわりから離れるような気持ちになる。
ウ　茶室の入り口が小さいのは、中を明るくせず、渋い色合いにするという美意識の表れである。
エ　茶室の中がうす暗いのは、謙譲の心で瞑想（めいそう）する場にふさわしい空間とするためである。
オ　茶室は年代を経て色あせ、落ち着いた風情となっていくが、亭主が念入りに掃除し、清潔な状態で客が招かれる。

問十二　Bの文章とCの文章に書かれている内容を次のようにまとめました。これを見て後の（1）～（3）の問いに答えなさい。

	権力に対する考え	自然に対する考え
ヴェルサイユ宮殿の庭	B［　Ⅰ　］の力の象徴	B［　Ⅱ　］
日本の庭・露地・茶室	B 権力否定の場 ＝ C 身分の区別をしない 具体例［　a　］	C［　Ⅲ　］ 具体例［　b　］

（1）［　Ⅰ　］に入る最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　神　　イ　人間　　ウ　専制君主　　エ　庭師

(2) 〔 Ⅱ 〕・〔 Ⅲ 〕に入る最もふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 自然らしさを大切にする。

イ 自然の生育も嫌う。

ウ 手つかずの大自然を第一と考える。

(3) 〔 a 〕・〔 b 〕に入る具体例として最もふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 庭の小道を歩くときが瞑想の第一段階である。

イ 客たちが地味な色合いの衣服をまとってくる。

ウ 掃除した庭にあえて木の葉を散らす。

エ 刀を軒下の刀掛けにかけてから茶室に入る。

オ すべての客が着座し、静かになってから亭主が部屋に入ってくる。

カ 客は身をかがめて小さな入り口から茶室に入る。

（おわり）

二〇二五年度
湘南白百合学園中学校入学試験

国語解答用紙

受験番号

□□□□番

氏　名

得　点

※には何も書かないこと

一

問一

① む

② ち

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

問二

①

②

③

問三

① ば く な い

② ら で き た

③ ず う

問四

1

2

3

4

5

問五

(1)

(2)

(3)

(4)

※

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

(1)

(2) X

Y

(3)

問九

※

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

a

b

問九

問十

問十一

問十二

(1)

(2) II

III

(3)

a

b

※